

「写真」と「映像」と「ことば」と「地図」
～アーカイブを用いて記録と記憶の隙間をうめる～

水島久光（東海大学）

1. 写真アーカイブの活用に関する仮説

デジタル・アーカイブに関する議論が盛んになる前、我々は、先行する研究分野である史料学の「教科書」に倣って、その構築・運用過程を述べるが多かった¹。しかし、そこに書かれた基本原則——1. 資料収集、2. 分類・整理、3. 活用の三局面を考えると、最後の「活用」こそが重要な課題であるとされながら、それが置き去りにされてきた感は、なんとなく払拭できずにいた。そもそも史料学においては、収集すべき対象の資料の価値基準は、「歴史的事実の認定」に寄与する点から予め定められてきたように思われる。しかし、記録が記憶を追い越して形成されていくデジタル社会においては、「1. 2.」すなわち資料化のプロセスそのものが「活用」と循環的、相互作用的な関係に置かれることから逃れることはできない。言い換えれば、その価値は「過去」に向ける眼差しで足るものではなく、「いま」に生きる人々の日常生活に並行してあるといえる。

中でも「写真」や「映像」といった視覚資料群は、あれこれの出来事やモノを指し示すものというよりも、我々の存在ととり囲む環境の関係を支える空間認識を補綴する役割が大きい。特に戦争や災害といった「日常」の破壊を経験した地域にとっては、なおさらにそうである。東日本大震災の津波被害が大きかった町で、今さまざまなアーカイブ・プロジェクトが立ち上がっている理由はそこにある²。生活の再建は、単に物質・機能的なインフラ構築にのみによって成し遂げられるものではない。「人の暮らし」を取り戻していくには、「暮らす人の実感」が蘇る、あるいは新たにそこに積み上げられていくことが不可欠なのである。

さて、夕張においては、この大前提はいかに解釈されるべきのだろうか。1960年代前半のピーク以降、事故、閉山、そして財政破綻という出来事を重ね、今や日本一人口密度が低い「市」となった自治体の行政的な目標課題は、必ずしも「往時の賑わいを取り戻す」といった直接的なものではないだろう。すでにこの町を離れた人も多く（むしろその方が圧倒的多数）、夕張の記憶と記録は全国に散っている。そうした人々が、過去の視覚資料群と出会うことは、「個別」の地域の現在あるいは未来を構想する方向から転じて、「地域なるもの」、すなわち「ひととひとが共に暮らしていく」とはどのようなことなのか——その条件と様相を対象とした、形而上学的関心に我々をいざなうのである。

津波に生活環境を破壊され、しかも災害危険区域に指定され「住むことができなくなった」地域をめぐる7年半後の今日の住民たちの取り組みは、まさに「地域」そのものが何によって成立するかを問うアプローチによって組み立てられている。夕張も同様であろう。ダムに沈んだ街・大夕張/鹿島の記録と記憶を結んでいく「活動＝活用」も、そうした数々の実践のコンセプトと地続きの位置にある。それは、「特定の場所に関わる経験」の共有を超える。はじめて出会う記憶の中の街であったとしても、それぞれの人が思う「地域」なるもののイメージを刺激し、人間が集散的に生きるということの意味に迫る可能性を拓く。

しかし「かつて、そこに街があった」記憶は、極めてランダムなかたちで人々の心の中に存在している。「写真」は、そこに「秩序」を与えていく契機となる。それは一つのコンテンツの中に時間を内包する「動画映像」との大きな違いである。各々が切り取られた断片でしかないからこそ、想像欲（イマジネール）を強く喚起するのだ。

¹ 東京大学教養学部歴史学部会（編）『史料学入門』岩波書店、2006

² 311 オモイデアーカイブ（仙台市）、「閉上の記憶」（名取市）、「けせんぬまアーカイブ」（気仙沼市）など

それはたとえ一枚であっても、我々はその奥行きを読み、背後に回り込もうとする。ロラン・バルトが発見した「プントゥム」（主観に鋭く訴えかけ、細部を発見しようとする経験を喚起する力；『明るい部屋』）の概念とは、まさにこのことである。それがもし、束になって存在をしたら……。

さらにヴァルター・ベンヤミンが『写真小史』で訴えた「知覚の新たな機能」を重ねると、「写真アーカイブ」の可能性がさらにはっきり見えてくる。彼は 1910 年前後に活躍した写真家——肖像写真一辺倒だったそれまでの「写真界」に対し、数多くの風景写真を発表し、衝撃を与えたウージェーヌ・アジェの作品群をとりあげ、そこに（有名なフレーズ）「アウラの消失」を見る。それは「集団によって作られる」非個人的知覚の出現である³。「アジェに至って写真は、歴史過程の証拠物件となりはじめている」（『写真小史』）。しかし、それはかつての文書館としてのアーカイブが奉じた大文字の「歴史」ではない。それは「生活状況全体の文書化」（『写真小史』）の可能性を拓く。

一定のボリュームをもった写真群に、人々が「集団」で向き合ったときに何が起こるのか。ここから我々は、ボトムアップでメタデータづけを行う可能性を考えることができる。人々が「ここではない」「いまはない」場所に、パラレル・ワールドのようにイメージを携えて向き合うことができるとしたら、そこでは言うまでもなく、リアルな時空間を相対化して、批判的に「地域＝人間の集合性」を捉える「眼」が開かれるに違いない。

2. 大夕張の写真の豊かさと困難さ

2013 年、14 年にデジタル化に着手した大夕張の記録の中で、最もボリュームがあるものが写真資料である。前回の鹿之谷ゼミナールで紹介されたように、800 点を超える写真群のその中心は、鹿島小学校に保存されていたアルバム（のちにシューパロダム管理事務所に移される）9 冊からスキャンした 291 点と、2006 年に石炭博物館で開催された「もうひとつの夕張・大夕張写真展」で展示された 235 点である。キャプションがついているものもあるが、その多くは名もなき住宅や建物、風景の断片ばかり——これらにどのように資料価値を付加していくかは、かなりの難題であった。

ヒントになったのが、震災後に仙台で活動を始めた「311 オモイデアーカイブ」の実践である。かねてから仙台的の古地図や古写真を用い、「暮らしの記憶」を発掘する活動を行っていた団体「NPO 法人 20 世紀アーカイブ 仙台」のメンバーを中心に試みられたアイディアは、極めて単純。「イベント的に掲示した写真群に、ポストイトで想起された情報を付記していく」とことと「写真をプロジェクションしながら、集まった人々が思い出を語っていく」という行為自体を記録に残していくというものであった⁴。しかしこれが実に効果的だったのである。写真をきっかけに、「記憶」の扉が開き「ことば」となって発せられる。そしてある「ことば」が別の「ことば」につながっていく、そのことを介して写真同士が結びついていく——このダイナミズムに出会ったとき、それには普遍性があると思われた。

2018 年になって、鹿之谷ゼミナールで「大夕張」をシリーズとして取り上げていくことになったとき、しばらく手をつけていなかったこの街に関する視覚資料群に、この「方法」を適用してみることを思いついた。しかし資料の大きさもさることながら、外部者にとっては「謎」の部分も少なくなく、どのようなステップを踏むべきか迷い、逡巡した。何しろかつての住民は全てこの町にはいない。一人ずつ「つて」を辿ってインタビューを繰り返しても、写真を意味づけしていきけるだけの「ことば」を拾うことは難しいだろう。そうこうしているうちに、鹿之谷ゼミナールのメンバーである H 氏から、札幌在住の大夕張出身者のグループ（「ふるさと鹿島 25 年会」）

³ 多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波現代文庫、2000、「アウラの消える日」p.45-62

⁴ 佐藤正実、小林美香編集『311 オモイデアーカイブ』2018、Ready for の助成を受け制作。筆者はここに「記憶は何のためにあるのか」という小論を寄稿。

とコンタクトが取れるとの話があった。

早速、10月17日（水）札幌市内のホテルで「ふるさと鹿島25年会」のメンバー（昭和25年生まれ）と恩師にあたる鹿島小学校元教員S氏の4名と会えることとなり、その場に「大夕張」の写真群のうち約100枚をラミネート加工したカードを提示しながら「話を訊く」機会を得た。次々と開かれていく「記憶」の扉。止まることを忘れたかのように噴出する話題に圧倒された。参加者も非常に楽しかったようで、すぐに翌11月4日（日）に東京上野精養軒で開催された「第54回東京大夕張会」の幹事につないでいただき、こちらの会場でも「話を訊ける」こととなった。東京では、参加者130名を超える大規模な会合への訪問ということで、札幌で行ったように一人ひとりに長時間を割いていただくことは難かしいと想定していたが、それでも多数の積極的な情報提供をいただくことができ、様々な発見・知見を得ることができた。二つの会には、心から感謝を申し上げたい。

3. どのようにして「記憶」は開かれていくか

写真を机に並べ始めると、参加者は一斉に「懐かしい」という声を上げ、身を乗り出してくる。しかし、その一枚一枚の写真ごとにそのリアクションは異なる。誰が見てもわかる写真と何が写っているのか判別が難しい写真。また撮影された年代によっても違う。一方、写真を見る側も、「いつまで大夕張にいたか」「どの地区に住んでいたか」「何をやっていたか」で、拾い上げる写真カードは様々である。

今回ラミネート加工を施した100枚の写真群は、比較的は被写体の情報量が多く、それらが記憶を想起させやすいことを想定して選択した。そのことはまずまず功を奏したが、一方それにより、写された地区や時代に偏りが生じてしまうという課題を残した。実際に、千年町や岳富町、大夕張駅周辺などの商店や事業所地区から選ばれた写真が多くなり、その一方で明石町や常磐町などがモチーフとなったものはこの写真群にはほとんどないことについての指摘も寄せられた。

ともあれ、二つのワークショップを経て、我々はそこで得られた「ことば」を記録し、以下のような分類を試みることができた⁵。

- ① 事実情報：名称、位置、年代、建物などの所有者・住人、分類（機能）など
- ② 関係情報：出来事、日常、前後関係、話者との関係、逸話など
- ③ 心象情報：対象への印象、当時考えていたこと、集団の雰囲気、価値観など

我々が、まず①から質問を繰り返していったがために、どうしてもこのカテゴリーの情報が多く、話題の中心にはなる。しかし時間が経過するにつれ②、③が表れ出す傾向は、二つの機会双方に共通していた。特に札幌では、少人数でしかも同年代ということもあって、次第に①の情報は枯渇し、もっぱら②、そして③へと話題は移っていった。東京では、ほとんどが①に時間が割かれた。長く滞留してくださった方が専ら②の話題を提供した。中には逆に、①は曖昧で、②～③を中心に思い出を話す方も稀にいた。

提供された事実情報の量は、参加人数に関係するとは言えるが、それによって確実性が必ずしも高まるわけではない。その人が事実情報を多く提供する方か否かは、長く暮らしたかどうかよりも、大夕張を訪ねている頻度と関係し、ダム湛水以降も含めた何度か現地を訪ね、街の変化を見てきた経験に裏打ちされるようだ。また、情報によほど自信のある人でない限り、先に与えられた情報が不確かであっても訂正することはしない。逆に、不確かなにもかかわらず、参加者同士話しあうことによって誤った事実情報が固定されていくケースもいくつかあった。

⁵ デジタル・アーカイブにおけるメタデータの記述方法については、Dublin Core（ダブリン・コア）と言われる15のプロパティによる指針が国際標準とされている。

http://www.ndl.go.jp/jp/dlib/standards/meta/about_dcndl.html（国会図書館）など参照。但し、このプロパティの核をなす description（リソースの内容の説明）の記述方法については自由とされている。

したがって、ワークショップ的方法のみによって事実・関係を同定していくことは危険である。「正確さ」よりも、この町における「暮らし」の様子や人々の心性、すなわち時空間認識のあり方や関心の方向性を知ることがまず成果としてはあって、①については、そこを手掛かりに別のリソースに取材をかけていくことで、固めていく手順が適切であるようだ。しかし、だからと言ってこういったプロセスは決して無駄ではない。②、③の情報の豊かさこそが、ミクロストリアの神髄といえる⁶。街の歴史は、そこに住んだ人々によって「書かれる」べきであり、またそれはその人々の生きた時代や暮らし方とともに、多様に見えてしかるべきなのである。

4. 興味深い「語り」「エピソード」

札幌、東京各々の会合で、写真群はたくさん「ことば」を引き出した。そのなかで、特徴的と思われたことばを以下に列挙しておく。

① 蘇る「空間感覚」

ラミネート資料群には三菱大夕張鉱業所を写したものが何枚か含まれていたが、それを指して「門からどのように曲がって建物の中に入るか」など、空間や習慣化された身体的「記憶」が頻りに語られた（札幌、東京とも）ことが印象的であった。特に建物の位置関係については、商店が並んでいた千年町や岳富町などの写真でも、それが正確であるか否かにかかわらず「〇〇の向かい」「××の並びに」といった、一つの建物を軸に360度を想起するパターンが多くの人に共通しており、それによってばらばらだった写真がつながりを獲得していった。

自分が暮らした家の写真が見つかるケースもあった。たまたま実家の「質店」の写真と出会ったFさん（東京・女性）は、それをきっかけに怒涛のように記憶が噴出し、その結果千年町の建物の配置関係がかなり「目に見える」ようになった。代々木アパートに住んでいたという人も何人かおり（東京）、各々「×階のこのあたり」と、自分の部屋を指さす姿が繰り返し見られた。この「指さす」行為こそが、写真が「実空間」から切り取られた断片として機能している証である。

少年時代を大夕張で暮らした人にとっては、学校は特別な場所である。その点でいえば、鹿島小学校、鹿島東小学校の写真はあっても、鹿島中学校の写真がなかったことは「残念である」との声は札幌・東京とも多く聞かれた。その一方で、学校のクラス数、学校建設が間に合わず二部制で授業をやっていた話は、「街の発展」を象徴するエピソードとして双方で語られた。教員は子供たちにとっては、最も身近な大人だった。その教員たちの記憶は鮮明である。先生たちが住んでいた「岳風寮」。学習塾を兼ねていたお寺もまたもう一つの学校だった。

② 大文字の「歴史」に残らない話、「歴史」に残る話

昭和38年か39年の事件。25年会の同級生のS君の妹が、雷に打たれて死んだ。それはとても衝撃的な出来事として、仲間たちの記憶に深く刻まれている。淡々と過ぎていく日常だからこそ、人の生死は心に残る。「市民プール」での溺死も、話題になった（札幌）。写真を見ながら、プールのどちらの縁の方が深かったかで話が弾む。

「消防署の脇の線路」でも、人が死んだらしい。小さな町だからこそ、身近な人の生死が気になるのか、それとも事故と紙一重の毎日を過ごす「炭鉱町」ならではの心性なのか。

『のど自慢』も中継もあったが、他にも街の音楽イベントで活躍したこのバンドの名前は“黒ダイヤ”。演奏した協和会館は、映画だけでなく、さまざまな街のイベントの殿堂だった。三橋美智也や林伊佐緒、奥村チヨも来た。他にも「大夕張劇場」があったと記憶しているが、写真には見当たらない。「シューパロ湖の見晴らし台

⁶ 水島久光「映像アーカイブ分析の方法：ミクロストリアの概念援用をめぐる覚書」東海大学紀要文学部、第101輯、2014

で、ドリフターズのロケも見た…」——大夕張は日本の先端の芸能界とつながっていた。それは誇らしい思い出。

辛い思い出もある。「小児麻痺」の流行のこと。「大夕張ではたぶん突出して発生したと思う」。衛生面は遅れていた。何しろ、石炭あつての街。「馬車か馬籠で、石炭を運んでいた。誰もが運ぶ手伝いをしてたが、1トンを運ぶのは中学生にならないと無理だった」。たぶん、大夕張は本町の方に較べると石炭は安かったと思う。「キロ5円くらい？」…。

——まさに小さな歴史(ミクロストリア)。これらの話は札幌で語られ、そして東京でも確認できたものである。

③ 「大夕張」の「こころ」

大夕張の人々は、自分たちが暮らす街に「夕張」の名はついていても、本町を中心とした「北炭」地域との違いを強く意識していた。上記の「石炭の値段」もその一つ。キロ当たり十分の一くらいだったと、札幌でも東京でも、誇らしげに語る。ともかく色々な面で、北炭地域との違いは意識されていた。僅かな差で却下された「分市」問題も、多くの人々の記憶に残っている——こういった話が、提示した写真を見ながらも、ちょこちょこ出てくる。

確かに、大夕張は特殊な「三菱文化」の中にあつたらしい。街には、東京の「三菱」から派遣されてきた社員たちの姿もあつた。東大、慶應、早稲田など有名大学出身の彼らと自分たちとの違いを感じながらも、「三菱」であることの同胞意識も、市民たちは抱いていた。

その緊密な関係感覚は、大夕張という地域の閉鎖性とも裏表の関係にあつた。強い同胞意識に包まれた空間は、逆に見れば「息苦しい」空間でもあつた——札幌では、「25年会」メンバーの間で「いつ、どうやって夕張を離れたのか」が話題になった。人口の割りに、高校、大学と、学修の機会に恵まれない環境。拓銀に務めていた女性(札幌)は、大夕張の支店の閉鎖とともに本町に移ったという。技術者として、職場を転々と移っていった男性(札幌)もいる。それでも「大夕張がふるさと」なのである。

5. 「断片」をつなぐ意味～そして「旅」「施設」の効用について

複数の写真群との出会いを契機に、記憶の扉が開いていき、そこに「ことば」が生まれ、その「ことば」を媒介しながら今度は写真たちが「秩序」を成していくというダイナミズムは、どこか「本を読む」という体験と似ている。アルゼンチンの作家、アルベルト・マンゲルは、実は「読む」という行為は、「星を読む」「手相を読む」「潮の流れを読む」などと表現されるように、極めて広い意味を持っていると指摘している(『読書の歴史』柏書房、p.19)。それは「わかる」という精神の働きの一局面を表している。高次脳機能障害の専門医である山鳥重はそれを「知覚心像」と「記憶心像」にわけ、その照合によって認識が生じるという(『「わかる」とはどういうことか』ちくま新書、p.33)。

それぞれの人の記憶、それ自体は点、あるいは漠然としたイメージにすぎない。しかしそれがつながり、何らかのまとまりを形成したとき「わかる」感覚が生ずるといふ。山鳥はそのまとまりには6つのパターンがあるという。「全体像」「整理」「筋」「空間関係」「仕組み」「規則」——これらはそのまま、大夕張の写真に出会った人々の「ことば」のバリエーションに対応する。そして「地域」とは、これらの要素を総合した小さな世界なのである。東京での会合において、ある人が言った。「同じ夕張という名でよばれるが、あちら(北炭側)とこちらは“別の世界”なんですよ。“炭鉱から観光へ”も経験していない。財政破綻だって、向こうが勝手にやった結果という印象がある。一緒にしてほしくない」。大夕張の人々のこうした強い意識は、この記憶の「まとまり」の強さから来るもののように思われる。

写真は、極めて「断片」性が高い。ゆえにこのイメージのまとまりを刺激する力も強いのかも知れない。その点、同じ視覚資料であっても動画映像は、すでに一つのまとまりを持って現れるので、例えば上映会などを開い

た場合の観客の「感想」なども、写真とは異なる表れ方をする——即ち「批評的」である。それは、思考の中でつながりをもった映像の「筋」を、再びもとの「断片」に戻す作業ともいえる。夕張において我々が行ってきた映像アーカイブの再編集作業（例えば一昨年、昨年とゆうばり国際ファンタスティック映画祭「ゆうばりアーカイブ」で学生たちが発表した作品）は、それを「思考」にとどめずに、あえて実際に複数の映像を「切り貼り」したものである⁷。

もともと夕張や大夕張に暮らした経験のない我々が、かの地での豊かな記憶をもつ人々とコミュニケーション可能な状況を設けるときに、アーカイブはその確かな下支えとなる——今回の札幌、東京でのワークショップを通じてそれを実感できたことは大きい。なぜならば、彼らの話を訊きながら、我々の脳裏にも「大夕張の風景」が立ち上がってきたからだ。もちろんそれは、彼らのもつ「イメージのまとまり」とは別のものではある。しかし、我々にも、我々の生活によって刻まれる記憶はある。そして毎日それを新たな知覚と出合わせ、認識を繰り返すことによって日常を送っている。そのレベルで、会合の参加者とシンパシーを交わすことは十分可能なのである——但し、それに多少の「知識」が加われば、よりコミュニケーションは豊かになる。「旅」、すなわち現地を訪ねることには、そうした効用がある。

デジタル・アーカイブの活用とは、こうした「断片」としての記録をつなぎ、それらと出会う人々の「記憶」を思考や対話のレベルに引き上げていく営みに他ならない。ゆえに、アーカイブは活用面において自由度をもったものでなければならない。もちろん、その「つなぐもの」として、旧来の「アーカイブズ」の主対象であった文書資料も極めて重要なパーツであることは言うまでもない。もちろんアクセス可能な資料のかたまりさえあれば、それは可能的にアーカイブの名で呼ぶことはできるが、その資料の在処を示すために何らかの「場所」があったほうがいい。バーチャルでも構わないので、いずれ大夕張にもそのようなものができることを期待したい。

資料の収集、そして分類整理、活用のサイクルは、その土地への思いを持つ人がいるかぎり、無限の循環を成していくことができる。「これからも、いつまでも」——それこそが、アーカイブに携わる人間の夢なのである。

⁷ 水島ゼミの学生たちは、過去の放送番組映像からシーンを切り出し、2017年度は「町とともに変わる駅」、2018年度は「賑わいを探して」という作品を上映した。